

# 埼玉育ちのグローバル人

## ကတဲးဟာၣ် ဂံၣ်းပိၣ်းကတဲးဟာၣ် ဂံၣ်းပိၣ်းကတဲးဟာၣ်

### 第1回「なぜໄປပဲးကတဲးဟာၣ်？」

#### 大宮アルディージャ U-12 コーチ

#### 遠藤 竜助さん



埼玉県マスコット「コバトン」



タイトルにある『ကတဲးဟာၣ် (テバーン)』という文字は、ラオ語で『サッカー』という意味があります。タイトルどおり、私の人生はサッカーなくして語れません。そんな私が『なぜໄປပဲးကတဲးဟာၣ် (パイパテートラオ) ?』(なぜラオスへ行くことになったのか?) を第一回では書いていきたいと思ひます。どうぞお付き合いください。



アヌヴォン像と朝日

### サッカー漬けの日々

小学2年生からサッカーを始め、中学生の時には神奈川県Jクラブ下部組織チームでサッカーをし、高校生の時は部活で、大学生の時は体育会サッカー部で、まさにサッカー漬けの日々。大学卒業時、プロサッカー選手になれる実力は全然ありませんでした。

私はサッカーが好きだったこと、子どもが好きだったことから、「サッカーを教える仕事をしたい!」、「子どもと深く関われる仕事がしたい!」と思いました。私自身、中学生の時に人間的にもサッカー的にも一番成長できたことから、生徒の成長を手助けしたいと中学校の教員になることを決めます。

その後、採用試験にも受かり、保健体育科の教員として勤務し始めます。と、まあここまでは順風満帆な人生を送ってきました。このまま定年まで教員でいるものだと思っていましたが、その後3年間で大きく変わるようになります。

### 恩師の助言～波紋～

中学生くらいの時でしょうか。ただ漠然と「海外に住んでみたい!」という想いは憧れ程度には持ち始めていました。教員になり、もう海外で生活することはないと考えていたのですが…

2年目の春のことです。職場のレターボックスにJICA 短期ボランティアのチラシが入っていました。教員1年目の時、サッカーしかやってこなかった自分には、もっと色々な経験を積んだ方が良く思っていました。良い機会だと思ひ、短期ボランティアを申し込もうと校長に話しに行きました。決してサッカーの経験で勝負できない訳ではなかったのですが、様々な生徒がいる中で指導の幅を拡げたいとそんなことを話した記憶があります。

私は校長に「国際協力、発展途上国支援って何

か知ってる？今のまま遠藤が行っても1ヶ月じゃ何もできないよ。」と言われました。

恥ずかしい話、1ヶ月のボランティア活動という以外、どこで何をするという要請内容を今でははっきりと覚えていません。当時、校長のこの一言で、そもそも国際協力、発展途上国支援ということが何なのか理解していなく、ただ海外で生活してみたいという中途半端な気持ちでいたことに気付かされました。

これを機に私は国際協力、発展途上国支援とは何なのか、自分には何ができるのかということ进行调查始めます。調べていくうちに「世界には困っている人たちがたくさんいる」、「自分にもできることがある」ということを知り、本当に発展途上国の力になりたいという気持ちが湧いてきました。

また、職場には海外生活を経験している同僚が何人かいて、その同僚たちに人としての魅力を感じていたことから、海外に行っても成長したいという想いが強くなっていたのです。

何を隠そう、私が相談しに行った校長も、実は日本人学校に6年も勤務したことがある海外生活経験者でした。さらにこの校長は、私が中学生の時に担任をしてくれた恩師でもあり、この恩師に憧れて「教員になりたい」、「海外に行きたい」と、生徒だった私は思い始めていたのかもしれませんが。

3年目の夏、私は再度恩師に相談へ行きました。恩師は私の想いを聞き、「石を水面に投げて波紋が広がるように、自分が行動を起こし、事がうまく運んでいたら行ってみると良い。うまくいかなかったら行くなってこと。」と、背中を押してくれました。

決意を胸に私は以前から調べていた青年海外協力隊に応募しました。そう、石を投げたのです。ちょうど私は3年生の担任をしていて、生徒と一緒に学校を卒業できる良いタイミングでもありました。

ここでよく誤解されるのは、教員を嫌いになってやめたと思われることです。決して教員という仕事が嫌になった訳ではありません。実際に卒業生も出させてもらい、幸せな教員生活でした。や

りがいのあるとても楽しい仕事です。ただ、現職参加では青年海外協力隊のサッカーという職種を選ばませんでした。私は自分の経験をフルに活かせる職種「サッカー」で行きたいと強く思っていたので、教員をやめる決意をしたのです。

## ໄປປະເທດລາວ

青年海外協力隊へ応募してから、話はトントン拍子に進み、見事合格。ラオスへサッカー隊員として派遣されることが決まりました。

実は初めて青年海外協力隊を知ったのも、ラオスを知ったのも、6年ほど前にラオスのサッカー隊員募集要項をたまたま見かけたことからでした。さらに一次試験の時にはラオスの要請はなかったのですが、二次試験の面接会場でラオスが追加要請されていることを知り、「波紋が広がっている！」と感じ、合格もしていないのに勝手に自分はラオスに行くものだと思っていたのを覚えています。

一般的に見てもそんなに変わった人生を送ってきてはいない私だったので、教員をやめ、青年海外協力隊としてラオスに行くことを知った周囲の方たちは親も含めて、とてもビックリしていました。私自身も後先考えずにとにかく動き出した状態。こんなに事がうまく運ぶと思っていなかったもので、「本当にいいのか？」という戸惑いがあったのは確かです。

恩師の言葉を信じ2015年1月、期待と不安を胸に私は未知の国ラオスへと旅立ちました。

ラオスに降り立つとそこには…

ラオス編の紹介は今回写真だけとさせていただき、第一回はここまで。

ຕະຫຼານ)はまず、私とラオスを繋いでくれました。



ラオスの象徴タートルアン